

---

# 風が紡ぐ聖杯戦争

七緒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風が紡ぐ聖杯戦争

### 【Nコード】

N1415Z

### 【作者名】

七緒

### 【あらすじ】

里の人々に疎外されていた少女は、任務先で仲間に見放され、身体に封印されていた『化け物』を引きはがされた反動で死んだ……はずだったのに、気が付くと全く見知らぬ世界で1人の少年の双子の姉になっていたのだ……

## Prolog(前書き)

新連載です。よろしくお願ひします！

## Prolog

「……………!」

もう…悲鳴を發する氣力すらなかった。

身体が内から引き裂かれるような強烈な痛みが全身を駆け巡っている。

いやだ……またあんなところにいるよ!!

本当に忍になるつもりなの?あんなガキが忍になったら…

お前なんて里の汚点だつてんだよ!!

…この期に及んで……走馬灯として脳裏に浮かぶこといったらそんなことばかりだった。

物心ついたときからこんな感じだった。

先代の里長と愛人との間に生まれたのが私らしい。

……だが、その愛人の一族が里に反旗を翻し……肅清された。  
その時に私も殺されるはずだった……が、愛する人の最後の願い『  
この子だけは生きさせてあげて』……を聞き入れるために……里に『  
居場所』を作るために……先代の里長は私に『七尾』という化け物  
を封印した。

お蔭で里には残ることが出来たけど……この有様だ。

里のはずれに一人で住み……少し外に出ると石を投げられ……冷たい見  
下した目で私を見てくる。

それが嫌で……見返してやりたくて……来る日も来る日も修行して……  
滝隠れ忍になった。

しかも見習い忍者である下忍じゃない。れっきとした一人前の忍者  
である中忍だ！それなのに……

里の人たちからの態度は変わらず……というか更にひどくなってい  
った。

ここんどこ続いている不況のせいだろうか？  
不満のはけ口が全て自分に向いていた。

来る日も来る日も……石を投げられ……腐った卵を投げられ……パン1  
つ買うのに任務で得た金の3分の1を使わされ……

任務で一緒になった忍も、『嫌な奴と一緒にになった』という目で見  
てきて……危険なところは私にすべて任せて……

そうそう……確かこんな目に合っているのも、一緒に任務していた忍のせいだ。

探索任務で『川の国』を移動中に、黒い衣に赤い雲模様の外套を羽織った男に私達……三人一組のスリーマーセルは襲われたのだ。

最初は三人で応戦していたのだが、圧倒的な力の差と……奴が『私』を狙っているということを知った途端、他の2人は私を狙ってきた。

……まさか仲間……じゃないな……『任務』仲間から裏切られるとは思っていなかった私は、あっという間に動けなくなった。

外套の男が私を連れ去る時に……一瞬……『任務』仲間の顔が笑っていたのを見た。

そして……奴らは私が見ているのに気が付くと、笑いながらこう言ったのだ。

これで厄介払いが出来たぜ！！

お前みたいなの『化け物』が俺たちと同じ『滝隠れ』の額当てをしているのを見るたびに吐き気がしたけど……もうその心配はねえな！！

……って……

……私……何のために生きてたんだろう……？

『認められたい』っていう一心で…その一心で…修行してきたのに

……

皆が心の底から笑い合う輪に…入りたかっただけなのに……

薄れゆく意識の中……急速に浮いていた身体が、支えを失って地面に急降下していくのを感じた。

ドサツ!!

身体が地面にたたきつけられたとき……すでに滝隠れの中忍……であり『七尾』の人柱力…『フウ』の魂は身体に宿っていなかった。

## Prolog(後書き)

えつと……主人公は滝隠れの里の忍……であり『七尾』を封印されていた人柱力の『フウ』です。次回からFateの世界が始まります。感想をくださると嬉しいです！



## 1話 手に入れた平穩

私は今…ぽかぽか暖かい空間でまどろんでいた。  
もうここから動きたくない…そう…このままずっとじっとして……

「ほら、起きなよ!!」

早くしないと学校に遅刻するぞ!!」

……うう……なんか物凄く揺すられている……

「やだ……もう少し…あと1分……」

「もうとっくにそのセリフ聞いてから5分経ってるってば!!」  
急いでよ、俺まで遅刻しちゃうよ!!」

「はいはい……って……」

ガバリッと私は起き上がった。

……自分を布団の上から揺すっていたのは7歳くらいの赤毛の少年  
……  
私が目覚めたのを見るとホツとしたのもつかの間、また怒った顔にな  
った。

「俺は遅刻したくないんだよ!

さっさと着替えて来いよな、風香ねえ!」

そういつと少年が部屋から出て行った……。

……………誰だ？あの子……………？なんかやけに馴れ馴れしかったが……………

「…っつー！頭痛い……………」

頭に来ていた大きなこぶを私はさすった。  
それから枕元に落ちていた分厚い本を拾った。

「あ……………きつと寝てる間にコレが棚から落ちて……………私の頭に攻撃してきたのか……………」

……………だからか……………」

私は深いため息をついた。

恐らく寝ている間に落ちてきたこの本が頭を攻撃した衝撃で、『前世』の記憶が蘇ったのだろう。

まったく……………前世の私はろくな人生歩んでなかったみたいだ。  
思い出さない方が良かった……………世の中の汚い面を知ってしまった気がする……………あ……………でも、自分の身に宿る『変な力』の正体が前世の影響によるものだということが分かったからいいか……………

ちなみに今の私の名前は『風香』

七歳で性別は前世と同じで女

頭の良さは平均……より少し下のぐくぐく普通の女の子……

ではないな……皆には黙ってるけど、変な力使えるし……

変な力というのは『チャクラ』という『術を発動させるのに必要なエネルギーの源』のようなものと『風を自由自在に操る力』だ。

私の前世は『滝隠れの里』という所に住んでいた正規の忍者『フウ』。

享年は……たしか16・7歳。

……ちなみに死因は、腐れ親父が私の体に封印した『七尾』というカブトムシみたいな『化け物』を引きはがした反動による衰弱死。

……この『化け物』が封印されてなかったら、私の前世も少しはマシだったかもしれないな。

七尾が私にくれたことと言ったら……『風を自由自在に操る能力』くらいだもん。

それと引き換えに里の奴らから『疫病神』みたいに扱われて……

しかも、この力が今生の私にも引き継がれているのも気に入らない。この力を隠すのが、どれだけ大変だったか……

初めてこの力に気が付いたのは物心ついてから少ししてから。気が付いたとき、私自身…『自分が化け物』に見えて気持ち悪かった。

だから、誰にも言っていないし、これからも知られたくない…

みんなから『化け物』扱いされたくない……前世の記憶がよみがえった今ならなおさらだ。あんな目で見られるのはこりごりだ。

ボタン!!

急に部屋のドアが思いつきり開いた。見てみると、さっきの少年が怒りで顔を真っ赤にしながら立っていた。

「風香ねええー!!俺まで遅刻させる気かよ!!

さっさと来いよ!!頼むからさあ!!」

「へいへい。分かってるって。」

「分かってない!!とにかく早く来ること!!」

少年はそう言うとりビングに去っていった。

私もすでに着替えを終えていたので後を追う。

……少年は私の双子の弟……『士郎』。

『今の私と同じ赤毛の持ち主だ。  
あ…でも、目の色が違うな…』

私は前世と同じ、オレンジっぽい色の目だけど、土郎の奴は金色っぽいを色してる。

日本人か？と疑いたくなるけど私も土郎も日本人の両親から生まれた生粋の日本人だ。

…ちなみに母親と父親は、すでに仕事に出てしまっている。  
だからリビングには土郎しかない。

「ふあ……つたく……私なんて置いて先いけばよかったのに……」

そう言いながらパンを食べ始めた。

本当はマーガリンとか蜂蜜をつけたいが…時間がもう7時50分…  
あまり余裕がない時間だ。

土郎がむすつとした顔をして私の前に座った。

「母さんが『物騒だから一緒に登校しなさい』って言ってたじゃん。

「あ………そういやそうか…」

最近、私達が住んでいる冬木市では殺人事件がやけに多い。

親が心配してくれるのも当然かもな…

でも……心配してくれる親がいてよかった……って思う。私には…

前世の私にはそんな人いなかったから…

「なにニヤついてんだよ？」

どうやら、顔に出ていたらしい……なんか恥ずかしい…  
私はゴホンッと咳払いをして立ち上がった。

「…別に何でもないって。ほら、歯磨きしたら行くから待ってて。」

「え…早!!もう食べ終わったの？」

「『忍たるもの、食事は敏速に』だからな。」

「……いつの間に風香は忍者になっただよ……」

呆れた感じでつぶやく土郎……それに私は答えなかった。

ただ……今、ここで平穏な毎日を暮せることが……前世の記憶がよ  
みがえった今…無性につれしくてたまらなかった。

## 1話 手に入れた平穩（後書き）

この頃は第四次聖杯戦争が始まる数日前くらいです。

『フウ』は『風香』として、『後の（衛宮士郎）の双子の姉として  
転生しました。

それにしても……士郎の『衛宮』の前の名字ってなんだっただろ  
う？

## 2話 新都に行きたい！

… P M 5時…

そこは女の戦場になっていたと言っていていいだろう。  
緊迫した雰囲気立ち込めていた。

「たあああ！！！」

「負けるかアあああ！！！」

ボタン

「……風香？もう4時だし綾香ちゃんの家は遠いから、帰る支度してもらいなさい。」

部屋のドアを開けて、家に入ってきた母親が、絶頂にあった2人に水を差した。

「え…もうそんな時間？」

「隙あり！！！！」



母親の言葉に反応して、ちらつと私が時計を見た。その隙をついて、綾香は必殺技を繰り出してきた。

「え……ちょー！！なんかHPが1に……！！死守しないと！！」

「隙を見せるのが悪いのよ。」

「とうか死守できるものならしてみなさい！！」

「ああああ！！私の女魔術師が……！！！」  
メイガス

鼻で笑う綾香……私は口を膨らませた。

クソ……片目で時計を確認しておけばよかった……せめて片目でも画面を向いていたら、避けられたかもしれなかったのに……悔しい思いが胸にたまった。

私は数少ない友人の1人……見綴 綾香と一緒に対戦ゲームに熱を上げていた。

前世は皆無だったが……今は友達と言える存在が何人かいる。

とはいっても……あまり友達づきあいが上手くないせいで、あまりいないのだが……

「6勝5敗……まあまあの結果ね……」

「……はあ……負けた……」

あゝ……あと一戦やったら逆転の可能性があったのに……！！」

「仕方ないよ。なんか最近怖い事件が多いし……早く帰らないといけ

ないからね。」

綾香が残念そうに言った。

本当に最近『殺し』が多い……  
別に死体は（前世で）見慣れているし、自分自身も（前世で）殺しをしたことあるし……

そこまで『殺し』というキーワードに恐怖心はわいてこない。

っというか、元・忍者である私にかなう殺人鬼がいるとは思えない。  
だから私は別に最近起こっている事件について気にしてなかった。

が、そうではない母親は何かと気にしていた。

『登下校は出来る限り士郎と一緒にすること』『友達と遊ぶのは4時まで』『鍵は必ず閉めること』『知らない人が来ても開けないこと』『……などなど……』

分かり切ったことを何度も繰り返して言うてくる。

士郎はうんざりしてたし、私自身うんざりするが……

でも、今はそれさえも『幸せ』だと感じてしまう自分がある。

だって……それは気にかけてくれている証拠だから……

前世の私には、その言葉をかけてくれる人はいなかったから……

……いや……一応いたな……

だがそれは、『私を心配して』駆けてくれた言葉ではなく……  
『アレしちやいけない』『ココには入ってはいけない』『任務がない日の夜間行動はいけない』といった感じで『皆が嫌がるからやるな!』といったたぐいのものだった。

「あ…そうだ!」

お母さん!明日さあ新都に行っていていい?」

夕食を食べ終え皿を下げながら母親に尋ねると、驚いた顔をされた。

『新都』というのは、川を挟んだ向こう側の、最近開発が進められている土地だ。

歩いていくと子供の足だと……数時間はかかるだろう。

「なんでさ?」

まだ肉じゃがを食べていた土郎が不思議そうにこっちを見てきた。

『風香ねえがなんで新都に?』

って思ったんだろっな……

「綾香ちゃんと約束してるんだ。

一緒に新都のデパートの屋上でやる『ファンタズムーン』のショーを見に行くんだ!！」

「……意外だな……風香ねえって美少女ヒーローものって見てたっけ?」

「（無視）ねえねえ!!」

お母さん……いいでしょ……?」

「そう……まあ……綾香ちゃんと一緒だったら平気かしら……」

まあ……門限は守るのよ。あとで交通費渡してあげるから。」

よっしやー!……!

母親からのOKでたー!……!

……いや……事実は曲げてるけど、嘘ばかりじゃないよ……

元々……綾香を誘おうとは思ってたし……（用事があるみたいで断られたけど……）

デパートの屋上でショーがあるのは事実だし……

でも……一番の目的は……

新都のデパートで、1ヶ月に一度先着限定発売されるといって『季節限定・特製柚子味バームクーヘン』を買いに行くためだ!!!

この日のために、コツコツお小遣いをため……欲しいゲームも我慢し……本も我慢したのだ!!!

絶対に手に入れてやる!!!

待ってるよ!!!バームクーヘン!!!

「……風香ねえ……絶対になんか別の用事が……」  
「土郎?何か言った?」  
「な……何も言っていないよ!!!ごちそうさま!!!」

……うん……物凄い笑顔を向けたら黙っててくれた。  
さすが私の弟よ……

その日は明日のことを夢見て幸せな気持ちで眠りについた……



## 2話 新都に行きたい！（後書き）

前世で甘いモノをほとんど食べられなかった反動で、風香は甘いモノが大好き設定です。

次回から原作（Zero）に少しかわっていく予定です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1415z/>

---

風が紡ぐ聖杯戦争

2011年12月7日02時53分発行